

中国人日本語学習者の単純語と複合語アクセント習得 —北方方言・上海方言話者による内省と発話の差—

柳 悦

1. はじめに

近年中国人日本語学習者を対象とした韻律に関する研究は、学習者の方言によって、単音レベルだけではなく、アクセント、イントネーションなどの習得にも違いが現れることが明らかにされている。しかし、これまでの調査方法を概観すると、福岡(1998)、鮎沢ほか(1999)など、聴取実験を主としたものである。だが学習者のアクセント習得の過程を考えると、学習者がアクセント型をどのように聞き取っているかとともに、学習者がアクセント型をどのように記憶しているか、さらに、聴取と産出つまり実際の発音とがどんな関係があるかを明らかにしていくことが、効果的な発音指導を行う上で必要であると思われる。そこで、本研究では中国北方方言を母語とする学習者(以下「北方方言話者」と日本語音声習得に有利とされる上海方言(野澤・重松(1997)、王伸子(1999))を母語とする学習者(以下「上海方言話者」)を対象に、アクセント習得の過程——内省・発話——に注目し、同年齢の学習者に対しては学習背景を統一して、要因を母方言^[1]のみと単一にし、日本語のアクセント習得の実態及び母方言の干渉について検証する。

2. 調査方法及び分析方法

被験者としての日本語学習者は、上海市(上海方言話者)、山東省済南市(北方方言話者)に位置する高等教育機関の日本語専攻の3、4年生それぞれ26名で、在日経験はない。調査時点では上級学習レベルとなっている。また比較のために、日本人8名に対しても、同様の実験を行った。協力者は、関東出身の大学生で、日本語の音声について、特に学習した経験はなかった。

内省調査と発話実験で使う単語は、すべて名詞で、中上級の学習者には既習の2拍～4拍の計34語の単純語と、それらを組み合わせた常用複合語19語である^[2]。

調査手順として、まず内省調査を実施した。学習者に実験単語をランダムに配置したリストを配布し、ピッチの下がり目がどこにあるかを心の中で読んで、ピッチの下がり目がある場合はその位置の仮名の上に「一」をつけ、ピッチの下がり目がない場合は、「0」と記すよう求めた。続いて発話実験を行った。内省調査と同じ実験単語を

異なる順番でリストに並べ、「〇〇がいいです」というキャリア文に埋め込み、被験者に2回ずつ読んでもらい、それをICレコーダー(OLYMPUS社製Voice-TrekDS-20)で録音した。

分析方法としては、すべて正解率を用いて刺激語全体、拍数別、アクセント型別などにグループ間の比較を行った。また発話実験においては、被験者実際のアクセント型を判定するために、すべて2回目の音声を使用し、それらを男女、日本人と学習者を区別せずに音声編集ソフトCool Edit 96でランダムな順になるように編集した後、カセットテープにダビングした。アクセント型の判定は、筆者がカセットテープから流れた単語を聞き取って、そのアクセント型を記録した。また判定結果を検証するために、日本語教育関係者4名⁹⁾にもアクセント型を同様の手順で判定してもらった。結果が異なる場合は、音声分析ソフトSpeech Analyzer 2.4でピッチ曲線を抽出して筆者が総合的に判定した。最終的に、すべての音声データにつき判定結果を1つにした。

3. 結果

3.1 内省調査

3.1.1 単純語

まず、全体像、アクセント型別正解率を図1、図2に示す。

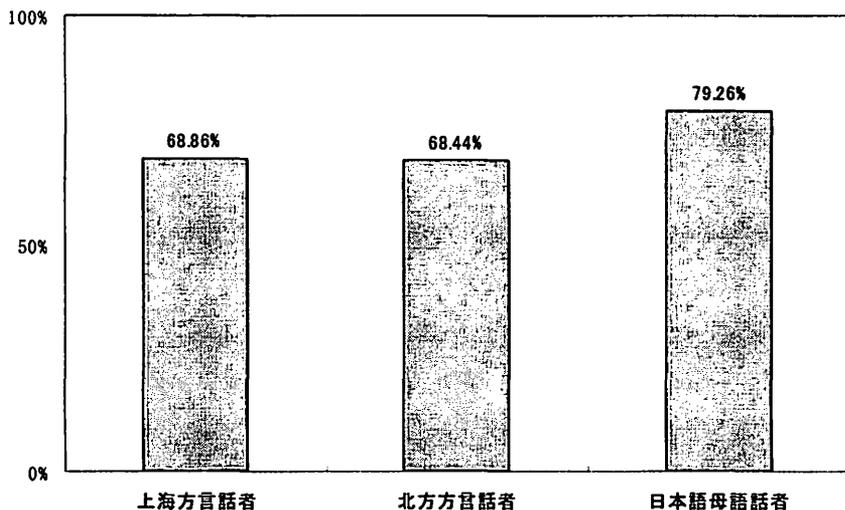


図1 両方言話者、日本語母語話者の内省調査による単純語アクセント正解率

図1から、全体的に、学習者より日本語母語話者の正解率が高いことが分かる。また上海方言話者と北方方言話者の正解率が同水準であることが分かる。日本語母語話者の正答率が80%に満たないことは意外に思われるかもしれないが、聴取実験では磯村(1996)、鮎沢ほか(1999)などの先行研究でも同様の結果となっている。続いてアクセント型別に見た正解率を図2に示す。

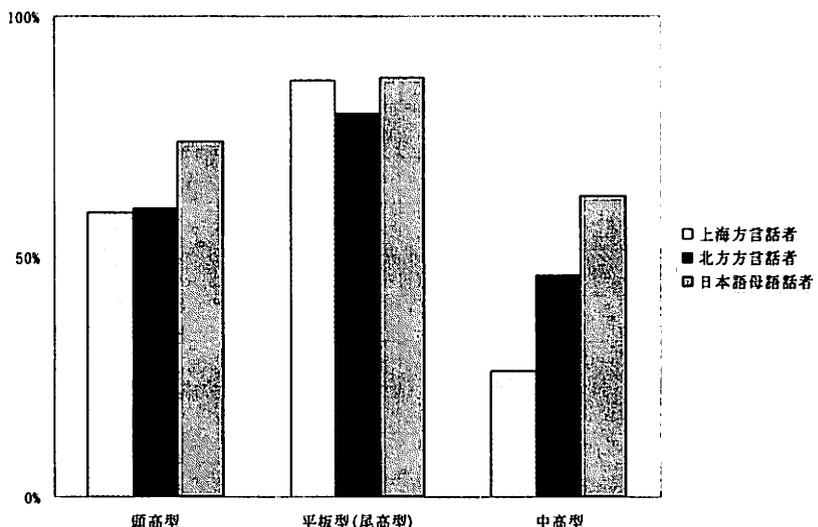


図2 両方言話者、日本語母語話者の内省調査による単純語のアクセント型別正解率

ここでは、被験者に単語のみを提示したため、尾高型を平板型に含めて見ることにした。図2では、三つのグループはともに真ん中の平板型(尾高型)の正解率が一番高いことが分かる。また頭高型では上海方言話者と北方方言話者はほとんど同じだが、平板型(尾高型)に関しては、上海方言話者の正解率が高く、中高型になると、北方方言話者より低いことが分かる。

表1は単純語において、上海方言話者と北方方言話者の回答を集計した結果である。網掛け部分は正答で、四角で囲んだ部分は誤答の中で比率が20%を超えたものである。ここから、学習者全体では、実験用語が平板型かどうかに関わらず平板型と回答する傾向があると見ることができる。また4拍語1型と2型は、上海方言話者が1拍を後ろにずらした回答が多く、2型には半分近くの学習者が3型とし、北方方言話者より約20%高くなっていることや、1型(頭高型)でも北方方言話者より10%以上誤答率が高くなっていることが分かる。

表 1 内省調査による単純語の両方言話者の回答 (%)

	拍数	7/21型	0	1	2	3
上海方言話者	2拍語	0型	94.87	5.13		
		1型	30.77	69.23		
	3拍語	0型	85.58	11.06	3.37	
		1型	45.19	48.08	6.73	
		2型	100.00	0.00	0.00	
	4拍語	0型	76.65	3.85	9.73	9.77
		1型	26.92	42.31	26.92	3.85
		2型	5.78	11.54	49.39	42.31
		3型	61.54	3.85	9.62	25.00
北方方言話者	2拍語	0型	84.23	5.77		
		1型	25.00	75.00		
	3拍語	0型	71.16	17.79	11.06	
		1型	52.89	37.50	9.62	
		2型	76.92	7.69	15.38	
	4拍語	0型	75.00	10.58	2.89	11.54
		1型	23.08	61.54	15.38	0.00
		2型	1.93	0.00	75.00	23.08
		3型	51.93	9.62	5.77	32.69

3.12 複合語

全体的には、図3に示したように、内省調査では、北方方言話者が日本語母語話者と同レベルの正解率であるのに対して、上海方言話者が43.38%でかなり低い成績で、両方言話者の正解率によるt検定を行った結果、1%水準で有意となった。

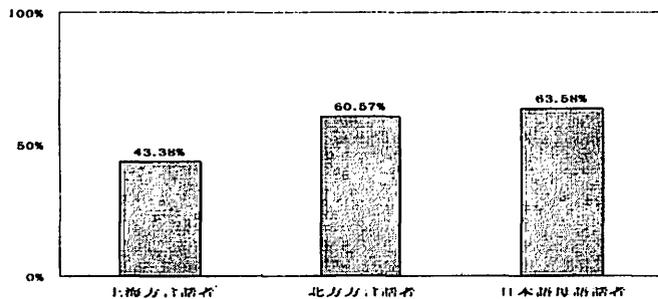


図3 両方言話者、日本語母語話者の内省調査による複合語アクセント正解率

続いて複合語のアクセント型別に見る両方言話者の正解率は、図4のように、平板型より、中高型のほうに差があり、上海方言話者の正解率が低いことが分かる。

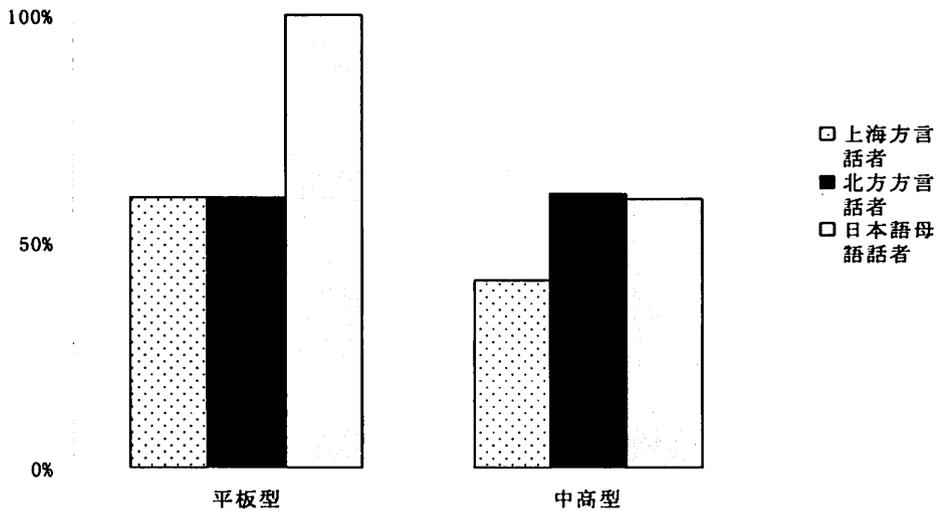


図4 両方言話者、日本語母語話者の内省調査による複合語のアクセント型別正解率

3.2 発話実験

3.2.1 単純語

まず、全体像、アクセント型別正解率を図5、図6で示す。

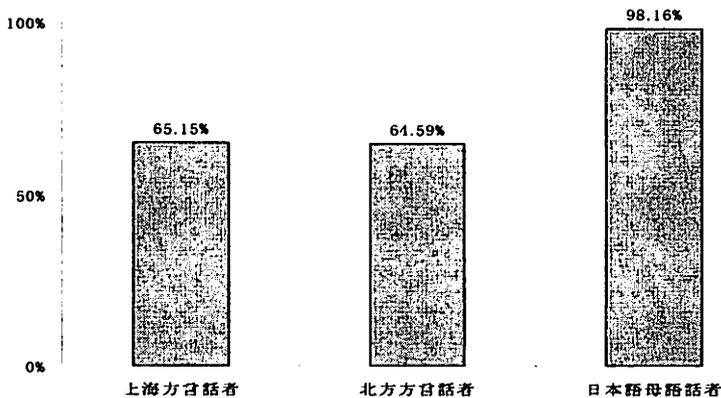


図5 両方言話者、日本語母語話者の発話実験による単純語アクセント正解率

図5から、全体的に日本語母語話者が100%に近い正解率であるのに対して、両方言話者ともに65%前後で同水準であることが分かる。

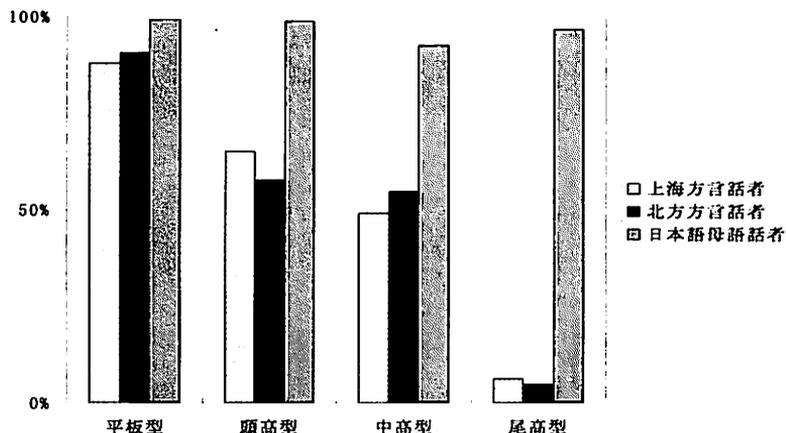


図6 両方言話者、日本語母語話者の発話実験による単純語のアクセント型別正解率

続いてアクセント型別に見た正解率を図6に示す。ここでは、発話実験の際、「○がいいです」というキャリア文に実験用語を埋め込んで読んでもらったため、後続助詞のアクセントから平板型か尾高型の弁別ができ、従って両アクセント型を別々に集計することが可能となる。図6から全体的に平板型の正解率が高く、また北方方言話者が上海方言話者より平板型と中高型が正確に発音できたことや、頭高型に対して、上海方言話者が北方方言話者より正解率が高いことが分かる。さらに図6を通して、もっとも正解率が低いのが両方言話者に共通して尾高型で、わずか5%前後だったことも分かる。

表2は両方言話者が本実験で単純語について、実際発音したアクセントパターンの集計である。表はアクセント型でまとめている、灰色の部分に正解率で、両者の数値が高い方にさらに線で囲んだ。これらを見ると平板型3拍語に対して両方言話者はほぼ同じだが、2拍語、4拍語は北方方言話者が優れていることが分かる。しかし、頭高型と尾高型になると、上海方言話者の正解率が比較的高い。また中高型の2型の場合、大きな差はないが、3型になると両方言話者ともに不安定さが見える。表の中に20%以上の誤答率をゴシック太字で示したが、両方言話者ともにその大半は平板型として発音してしまったという傾向が窺える。

表2 両方言話者発話実験による単純語アクセントの実態 (%)

7セト 型	拍数	単語	上海方言話者					北方方言話者				
			0	1	2	3	4	0	1	2	3	4
平板型	2	虫	85.0	5.0	10.0			88.5	7.7	3.9		
		酒	95.0	0.0	5.0			100.0	0.0	0.0		
		膝	90.0	0.0	10.0			96.2	0.0	3.9		
		札	80.0	10.0	10.0			88.6	7.7	3.9		
	3	女性	100.0	0.0	0.0	0.0		100.0	0.0	0.0	0.0	
		時計	100.0	0.0	0.0	0.0		100.0	0.0	0.0	0.0	
		手紙	90.0	0.0	5.0	5.0		76.9	15.4	0.0	7.7	
		野球	90.0	5.0	5.0	0.0		100.0	0.0	0.0	0.0	
		中古	75.0	20.0	0.0	5.0		76.9	23.1	0.0	0.0	
	4	左	90.0	0.0	0.0	10.0		96.2	0.0	0.0	3.9	
	4	大阪	75.0	0.0	0.0	20.0	5.0	84.6	3.9	0.0	11.5	0.0
		大学	65.0	10.0	0.0	25.0	0.0	76.9	0.0	3.9	19.2	0.0
		高層	95.0	0.0	0.0	0.0	5.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
運動		100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	84.6	0.0	0.0	15.4	0.0	
頭高型	2	ビル	0.0	100.0	0.0			0.0	100.0	0.0		
		プロ	25.0	75.0	0.0			34.6	65.4	0.0		
		会	10.0	90.0	0.0			19.2	80.8	0.0		
		猫	5.0	95.0	0.0			11.5	88.5	0.0		
		人	5.0	95.0	0.0			3.9	96.2	0.0		
	3	生	80.0	15.0	5.0			80.8	11.6	7.7		
	3	メガネ	0.0	100.0	0.0	0.0		7.7	92.3	0.0	0.0	
		緑	15.0	85.0	0.0	0.0		42.3	53.9	3.9	0.0	
		親子	90.0	5.0	0.0	5.0		84.6	7.7	3.9	3.9	
		枕	65.0	30.0	0.0	5.0		92.3	7.7	0.0	0.0	
	4	韓国	55.0	25.0	0.0	20.0	0.0	57.7	30.8	3.9	7.7	0.0
	尾高型	2	色	90.0	0.0	10.0			92.3	0.0	7.7	
腕			95.0	0.0	5.0			92.3	3.9	3.9		
3		招き	90.0	0.0	5.0	5.0		88.5	0.0	7.7	3.9	
		柱	85.0	10.0	0.0	5.0		80.8	15.4	0.0	3.9	
2型	3	たまご	95.0	0.0	5.0	0.0		80.8	0.0	11.6	7.7	
		希望者	10.0	0.0	90.0	0.0	0.0	7.7	0.0	92.3	0.0	0.0
	4	自動車	15.0	0.0	85.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
3型	4	番号	90.0	5.0	0.0	5.0	0.0	50.0	7.7	0.0	42.3	0.0
		金持ち	40.0	0.0	0.0	60.0	0.0	73.1	0.0	0.0	26.9	0.0

3.2.2 複合語

ここで、学習者の複合語アクセント発話実験の結果を提示する。

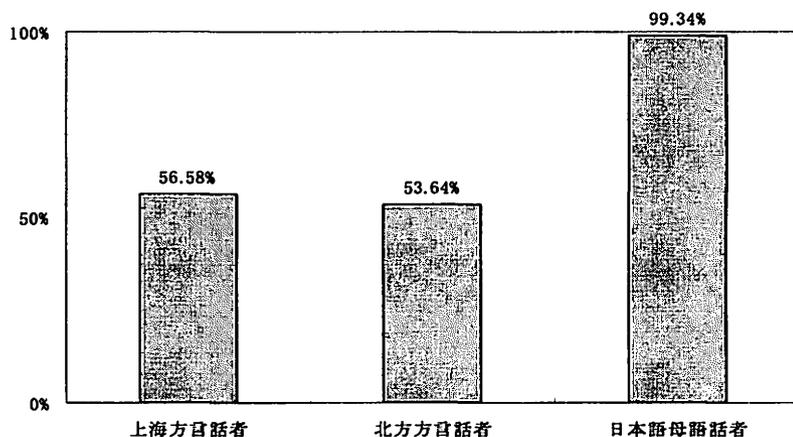


図7 両方言話者、日本語母語話者の発話実験による複合語アクセント正解率

図7から、全体的に日本語母語話者が100%に近い正解率だが、両方言話者ともに50%台であることが分かる。

続いてアクセント型別に見た正解率を図8で示す。ここでは実験用語数の影響もあって平板型の正解率は両方言話者ともに低い数値となった。また中高型の場合、上海方言話者が北方方言話者よりやや高いことが分かる。

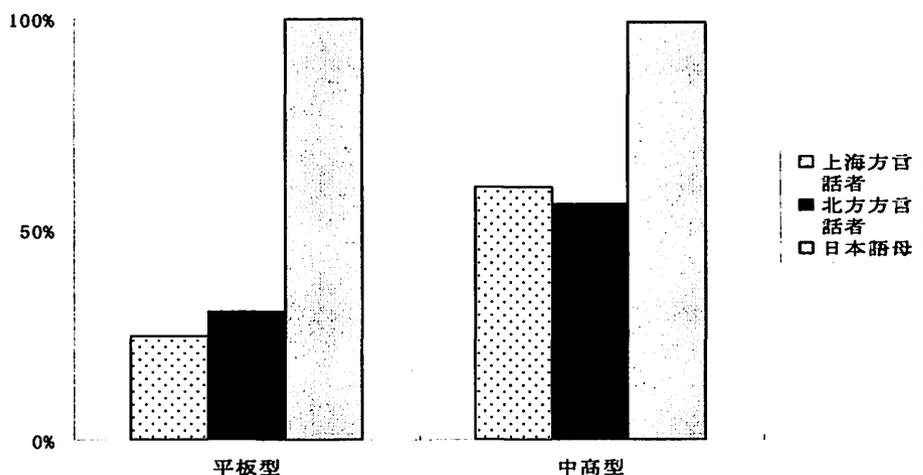


図8 両方言話者、日本語母語話者の発話実験による複合語のアクセント型別正解率

3.3 内省調査と発話実験の比較

同じ単語に対して内省調査と発話実験の差を見るために、図9のようにまとめた。

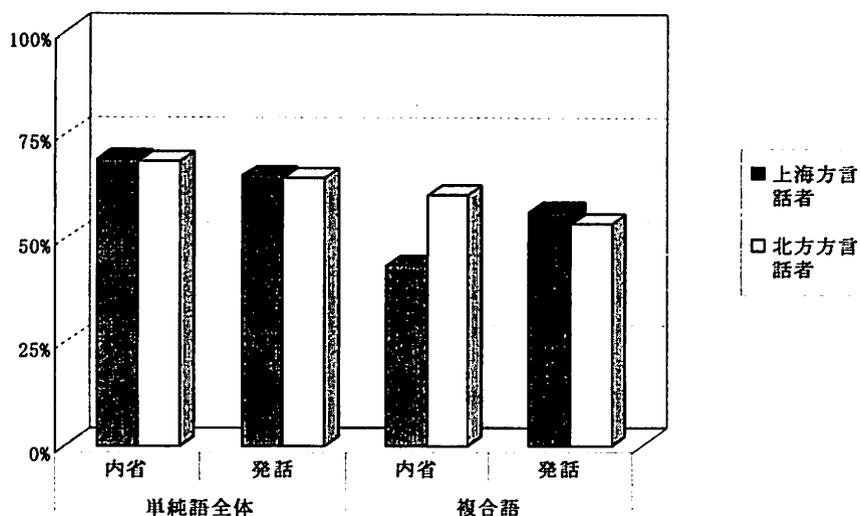


図9 両方言話者単純語と複合語の内省調査と発話実験正解率比

この結果から、全体的に見て上海方言話者が北方方言話者より正解率がやや高いことが分かる。また単純語の場合、両方言話者ともに内省より実際の発話のほうが正解率が低いことが分かる。しかし複合語になると、北方方言話者は依然として内省調査の正解率が高いが、上海方言話者は逆のパターンとなり、複合語の発話の正解率は内省調査より13%上昇したことが分かる。

4. 結論

今回、中国北方方言話者と上海方言話者を対象に日本語の名詞単純語と複合語アクセント習得実態を調査したところ、主に以下のような結果が得られた。まず、内省面において、単純語の場合は両方言話者が近似した結果で、誤答の傾向もともに平板型が高かったが、全体的に上海方言話者の平板型の正解率が高いことが分かった。続いて複合語に対して、上海方言話者が北方方言話者より正解率が低く、中に中高型がもっとも差があることが分かった。そして、実際の発話では、単純語は内省調査と同様に両方言話者に差はないが、複合語になると、逆に上海方言話者のほうが正解率が高く、特に中高型の複合語が北方方言話者より正解率が高いことが分かった。

4拍語までの日本語に対して、両方言話者ともに同じような学習結果であったが、5拍以上の複合語になると上海方言話者が実際の発音では北方方言話者より優れている結果となった。これは、両方言話者が4拍以内の日本語に対して、ほぼ同レベルの習得能力を持っていて、方言が違っていても、同じ声調言語であることから、習得に大きな影響はなかったと考えられる。しかし、5拍以上の単語、特に複合語になると、そのアクセント型を概観すると中高型が多く占めていることで、上海方言話者に実際の発音で優勢が現れたのは、両方言の韻律による違いなのではないだろうか。北京語は普段一文字であっても、二文字になっても、一字ずつには、「四声」⁶⁾が明確のうえ、2音節以上の単語には「前平後降」のパターンがもっとも多いことから、北方方言話者は中高型が多く占めた日本語の複合語に対して、一度上がって、ピッチの高さを保ったまま途中で下降するという発音規則に馴染めず、結果的、北方方言話者特有の激しいアップダウンが多く見られたと思われる。しかし、上海方言には連続変調⁶⁾という現象があり、音の高低に対して、絶対的な存在ではないと考えられる。そのため、複合語の内省面では、不安定さを感じたが、実際の発音では、上海方言の連続変調には二文字目が一番高くそこから降下するという日本語の中高型アクセントに似るパターンが多いことから、日本語の5拍以上の複合語に対して、上海方言話者の母方言の連続変調が正の干渉となったのではないだろうか。

5. 今後の課題

今回、中国北方方言話者と上海方言話者に対して、日本語の名詞単純語と複合語アクセント習得の差を見るために、習得の過程と関わる内省、発話の観点から調査を行った。実験が被験者にかかる負担を考慮して、実験用語の量を十分に提示することができなかった。今後もっと実験用語を抜粋し、ほかの方言話者も取り入れ再検証を行いたい。

また、今回は両方言話者ともに上級者だったが、今後同グループ内の初級学習者も対象とし、さらに同グループの初級、中級、上級の各日本語運用能力における縦断的調査を行い、それらの結果を比較し、各学習段階において、どのような差があるか、またその成長過程においてどんな傾向があるかを探っていきたい。

注

(1) ここで言う母方言は、学習者の出身方言の代表的なものを指す。現在上海方言は呉方言の代表として一般的に認識され、山東方言は北方方言の下位方言とし、北方方言の代表は一般的北京語と認識されている。

(2) 単純語 34 語：

2 拍語：頭高型：プロ、人（じん）、生（なま）、猫、ビル、会（かい）

平板型：虫（むし）、膝、札（ふだ）、酒（さけ）

尾高型：色（いろ）、腕（うで）

3 拍語：頭高型：めがね、枕（まくら）、親子、緑（みどり）

中高型：たまご

平板型：野球、時計、手紙、左（ひだり）、女性、中古

尾高型：柱（はしら）、招き

4 拍語：頭高型：韓国

2 型：自動車、希望者

3 型：番号、金持ち

平板型：大学、高層、運動、大阪

複合語 19 語：

たまご酒、韓国人、緑虫、番号札、運動会、招き猫、高層ビル、左腕、緑色、虫メガネ、膝枕、金持ち親子、中古自動車、女性希望者、プロ野球、生たまご、柱時計、置き手紙、大阪大学

(3) 日本語教育能力検定試験合格者、日本語教育、方言学が専門となる研究者で、普段音声のチェックや、日本語アクセントに関する知識を熟知した方である。

(4) 評価者間の一致度を確認するため、Cohen's κ の値を求めた結果、全実験用語において $k=0.8$ となり、かなりの一致度を示したと考えられる。Cohen's κ 値はどの値以上であれば、一致度が安定しているかという明確な基準はないが、今回のような、音を聞いて直感的判断が伴う作業の場合は、0.7 以上とされている。従って、評価者の結果を統合して採用することは可能である。

(5) 現代の中国語は北京語を共通語としており、その声調は「陰平」、「陽平」、「上声」、「去声」の四つに統合し、通常「四声」と称する。

(6) 上海語では二つ以上の音節が続くと、その漢字の本来持っている声調が失われ、「連続変調」という現象が起こる。それは単なる声調変化というよりむしろ一語一語に新たなアクセントパターンが与えられると考えた方が理解しやすいだろう。

参考文献

- 鮎沢孝子、海野多枝、西沼行博、小高京子（1999）「東京外国語大学学部留学生の東京語アクセント習得」文部省科学研究費（創成的基礎研究費）「国際社会における日本語についての総合的研究」新プロ「日本語」ESOP チーム平成 10 年度研究成果報告書 55-64 頁
- 磯村一弘（1996）「アクセント型の知識と聞き取り——北京語を母語とする日本語教師における東京都アクセントの場合——」『第 10 回日本音声学会全国大会予稿集』日本音声学会
- 野澤素子・重松淳（1997）「中国語話者の日本語学習における音声の問題について——北京語・上海語のイントネーションをめぐって——」『日本語と日本語教育』第 25 号 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 福岡昌子（1998）（「イントネーションから表現意図を識別する能力の習得研究 中国 4 方言話者を対象に自然。合成音声を使って」『日本語教育 96 号』頁 37～48
- 楊立明（1993）「中国語話者の日本語述部の韻律に見られる母語の干渉」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D 1 班平成 4 年度成果報告書
- 柳悦（2006）『中国北方方言・上海方言を母語とする日本語学習者のアクセント習得の実態及び母語干渉の原因』東京都立大学修士論文（未公刊）

（りゅう ゆえ・首都大学東京大学院生）